

博士学位申請論文

現代中国における「八〇後」文学

<論文要旨>

西南学院大学大学院
国際文化研究科 国際文化専攻

王 宇南

指導教員 新谷秀明教授

<論文要旨>

「八〇後（バーリンホウ）」という新しい中国語は21世紀の始めに現れ、中国の文学界や芸能界など各領域で使われ、世界的にも注目される重要な文化的キーワードになっている。「八〇後」は狭義として1980年から1989年までに生まれた世代を指し、広義として1980年代以降生まれた若者を指している。

「八〇後」文学は、1999年に中国大陸で開催された第一回新概念作文コンクールで初めて頭角を現したと仮定すれば、2019年でちょうど二十年間になる。「反逆児」と呼ばれた当初から、文化市場において「八〇後」文学の作品が圧倒的な比率を占める今日まで、

「八〇後」文学の発展過程は常に文学界を含め社会各界の注目を浴びている。2010年代から、「八〇後」世代は次第に「而立」の年を迎え、徐々に各職場においても責任のあるポストに就くようになった。成長に伴い、当初の反逆精神が次第に落ち着き、世界観と価値観は年齢と共に成熟し、「八〇後」世代は「反逆児」から中国社会の主役へ転換する重要な時期を迎えた。現代中国を「八〇後」らしく記録することが「八〇後」作家の天職である。既成の文壇を主体とした主流文学の影響をある程度打破したため、「八〇後」文学が反映した現代中国のイメージは主流の文学が描いた社会形態と異なる部分が多く存在している。より立体的で客観的に現代中国を知るためにも、「八〇後」文学について研究を続けなければならないのである。しかし、現在の中国社会が「八〇後」世代に与える評価と主流の文学界が「八〇後」文学に与える評価はまだ十分に客観的なものではないと思われる。「八〇後」文学は文学ではなく、単なる文化現象であり、文学として研究する意義は大きくないと考える人さえいる。しかし、「八〇後」文学が中国の文芸市場においてこれほど大きなシェアを持つことは事実であり、中国の歴史の中においても珍しい状況であることは否定できない。

「八〇後」文学に対する研究は、中国文学史と文学的理論、または新世紀の中国文学における諸問題を考察するにあたって欠かせないことであると考え、筆者は本研究を計画した。

本論文は、第一部の【「八〇後」文学の発展過程】と第二部の【作品からみる「八〇後」文学】から構成される。第一部においては、「八〇後文学」がどのように誕生し、そしてメディアによって宣伝され、読者に読まれるのか、その過程と仕組みを明らかにする。第二部においては、「八〇後」文学の作品に着眼する。

第一章 中国の「八〇後」世代

前世代の人から見れば、「八〇後」はとても幸運な世代であるのに違いない。「小皇帝」と呼ばれる彼らは、生まれた時から比較的豊かな環境に恵まれていた。しかし「八〇後」世代自身に言わせると、彼らはそれほど幸福感を感じていないようである。マクロな視点から「八〇後」世代の成長過程と社会環境を振りかえってみると、「八〇後」世代は改革開放政策実施後に生まれ、社会主義市場経済体制の実施と改善に伴い、日々の発展とともに成長し、経済のグローバル化とインターネットの急激な発展の影響を深く受けている。「八〇後」世代の成長過程において、中国社会の物質的生活は日々豊かになり、政治的環境も比較的安定していたが、同時にさまざまな文化思潮と多様な価値観が急速に現れた。この時期の中国社会を最も代表する言葉は「政治」から「経済」に変わり、伝統的価値観は大きな変革を迫られた。ミクロな視点から家庭構造を見れば、「八〇後」世代は計画出産政策施行後に生まれ、その多くが一人っ子である。「小皇帝」の元祖とも言え、親や祖父母からの愛情を一身に受けて育てられた。彼らは他のどの世代よりも裕福な生活環境と高い教養を備えている。しかし、彼らの比較的孤独な成長環境が「社交性が劣る」ことや、「わがまま」、「利己的」、「傲慢」、「頑固」、「脆弱」などの性格の欠点も間接的に招いた。そのため、他の世代と比べれば、彼らは「変わり者」に見えるかもしれない。第一章では中国の「八〇後」世代の成長過程及びその社会環境について考察し、「八〇後」世代の全体的特徴について説明する。

第二章 「八〇後」文学の誕生

第二章では「八〇後」文学の誕生背景と要因について考察し、なぜ「八〇後」作家は数年の中で中国の全土そして世界まで一躍有名になったのか、その理由について分析を行う。そして、「八〇後」文学の誕生に最も大きな影響を及ぼした雑誌『萌芽』と『萌芽』出版社が主宰した「新概念作文コンクール」について考察する。『萌芽』出版社は当初経営改革の一環として新概念作文コンクールを開催したが、結局新概念作文コンクールによってほとんど息も絶え絶えであった『萌芽』は現在人気文学刊行物として再度中国の現代文学界で異彩を放っている。しかし、新概念作文コンクールは『萌芽』だけではなく、中国文壇にとっても極めて重要な意義を持ち、「八〇後」作家の育成に欠かせない重用な役割を果たした。このような新概念作文コンクールは具体的に「八〇後」作家にどのような影響を与えたのか、考察を試みる。

第三章 「八〇後」文学の舞台

第三章では、「八〇後」文学の舞台になる青春文芸誌、特に「八〇後」作家が創刊する青春文芸誌について考察する。近年、『人民文学』や『収獲』など20世紀80年代頃に大変人気があった伝統的文芸誌が中国で低迷する一方、多くの青年作家（主に「八〇後」作家）が創刊する青春文学の文芸誌が流行している。なぜ青年作家は凶らずも一致して青春文芸誌を創刊し、しかも評論家や前世代の作家からは批判的に見られる青春文学を盛んに取り上げることができたのか、その理由について分析を行う。また、青春文芸誌と「ムック(mook)」は密接な関連を持つ。「ムック」は中国においていったいどのような出版物であり、どうしてこれらの青春文芸誌は最初、あるいは現在でもムックの形式で出版しているのか。「ムック」いう出版形式はこれらの青春文芸誌にどのような影響を与えているのかについても考察する。

第四章 「八〇後」文学舞台の進化

「八〇後」の代表作家である韓寒が編集長を務めるスマートフォン雑誌アプリ『ONE・一個』は単なるスマートフォン雑誌アプリ、あるいは「文芸誌」ではなく、大きな影響力を持つ青春文学のブランドになり、次世代の文学者を育てる舞台になっている。第四章では『ONE・一個』を例に、その誕生と発展過程、そして掲載された文学作品などを分析することによって、進化した「八〇後」文学の舞台が「八〇後」作家や読者、そして「八〇後」文学に与えた影響、またそれがどのような意義を持つのかを考察する。

第五章 「八〇後」文学が受けてきた影響

「八〇後」作家とその作品が数多く存在し、作風もそれぞれ異なっているため、「八〇後」文学の全体的な特徴を纏めるのはかなり難しい。しかし、今までの「八〇後」文学は大体以下の印象を読者に与えているといえよう。作品は思想性にこだわらず、個人的情緒と感覚に頼り、結果として作品の内容が単一であり、芸術性と社会的意義が比較的浅い。国家や歴史、政治問題などに対して無関心であり、社会的に重いテーマを避ける傾向が見られる。作品の中では、青春期の愛や痛み、憂鬱、孤独感が溢れている。彼らの親世代と比べれば、退廃的な情緒が目立つ。無論、これは「八〇後」世代の成長環境と文学的教養

に関係がある。第五章では外国文学、外来文化の「八〇後」文学に対する影響、そして慶山文学の「八〇後」文学に対する影響について考察を試みる。

第六章 感傷的な「八〇後」文学

「八〇後」文学において、「感傷」という言葉は重要なキーワードである。多くの「八〇後」文学作品が青春期の困惑と孤独をテーマに取り上げ、感傷的情緒を描いている。

「感傷美」は「八〇後」作家が求める美学の一種であると思われる。実は、感傷的情緒を強調して描くのは「八〇後」文学に特有なものではない。古今東西を通じて多くの文学作品が人間の感傷的情緒に対して力を入れて表現してきた。しかし、感傷的情緒が溢れる

「八〇後」文学は多くの文学評論家に否定的に評価されている。「八〇後」文学の代表作家である郭敬明の感傷的文学を「宦官文学」と鋭く非難する人さえいた。第六章では、

「八〇後」文学における「感傷的情緒」は中国現代文学史に現れた感傷文学の作品と比較してどのような特徴を持ち、その形成理由および意義を分析する。

第七章 「八〇後」文学における書式と文章記号の使用

「八〇後」文学は言葉の個性を非常に重視し、近似音を利用したり、語順を変えたり、語義を変えたり、通常 of 文法規範に反する表現をしたりして、言葉の革新に力を尽くしている。また、一部の「八〇後」文学作品において、現行の『図書質量管理規定』に反する書式と文章記号の使い方も見られる。第七章では上海最世文化発展有限公司が企画し、長江文芸出版社が2014年に出版したエッセイ集『THE NEXT・NAPLES（下一站・那不勒斯）』と「一個工作室」が企画し、浙江文芸出版社が2015年に出版した短編小説集『和喜歓的一切在一起』の二冊の本を例に取り上げ、従来の文学作品と比較しながら、「八〇後」文学の作品における書式と文章記号の使い方の変化、またはその変化の理由と中国現代文学に対する影響について考察を試みる。